雲晴

秋彼岸号

「雲　晴」第十二号
平成二十六年九月一日発行

貞林院瑞正寺
〒125-0041 東京都葛飾区東金町五－四六－五
電話（〇三）三六二七－三四一一
FAX（〇三）五六九九－五九一五

おしえの花束

一度止まってみる

お彼岸がまいります。心が乱れる騒々しいところを離れて、静かなところに身をおき、「私の人生、二度とない人生、これでいいのかな」って、改めて見つめなおしてみる日々が、お彼岸なんですねぇ。

お釈迦さまが教えて下さっています。

「いつも雑踏の中に身をおいていたのでは、正しい考えや判断、決断はできない。静かなところにひとり身を落ち着けてごらんなさい。心が落ち着き、正しい考えが生まれます。まちがいのない判断ができます……」と。ちょっと手の平に書いてみて下さい。一と止まるという字を……。二つ合わせると正しいという字になりますね。正しい判断や決断をせまられたら一度止まる……。一度止まるから正しい考えが生まれる……。いやぁ正しいという漢字、よーくできています。

お彼岸は一度止まる日……なんです。少しむずかしくいえば、ものごとを正しくとらえて、真実か否かを見極める眼や心の力を養い、完成することに努力する日々がお彼岸です。そのためには、

一、見返りを期待することなく、他の人々のために尽くす行いをしましょう。（布施）
二、生活習慣を整えましょう。（持戒）
三、ほめられても、けなされても、心を動揺させないでたえましょう。いつまでも続きませんから。（忍辱）
四、他のことをあれこれ考えることなく、いただいた今の仕事にひたすら打ち込みましょう。（精進）
五、これらのことが実行できれば、心を安定させることができます。実行してください。（禅定）
六、そして、この五つの実行は、真実を見極めることのできる眼や心の力を完成するのです。仏教ではこのことを「智慧の完成」といっています。（智慧）

「智慧あれば貪着無し」、身も心もすっきりしてしまうんですねぇ。おだやかなお彼岸の日々に、身にも心にもおだやかさを取り戻したいものです。

●「干支について」●

念佛院住職　中野隆英

「えと」という字を書けるだろうか。意味は分かっても書けない言葉はいろいろある。今日はこの「えと」という言葉に注目してみよう。

干支は二種類に分けられる。まず多くの人が知っている「十二支」から。これはあてはめた動物の字が違う。「子・ね・鼠」「丑・うし・牛」「寅・とら・虎」「卯・う・兎」「辰・たつ・竜」「巳・み・蛇」「午・うま・馬」「未・ひつじ・羊」「申・さる・猿」「酉・とり・鶏」「戌・いぬ・犬」「亥・い・猪」以上。江戸時代には時刻や方角も「十二支」を使ったので、お昼前を「午前」と言ったり、北から南にのびる線を「子午線」と呼んだり現代も言葉が残っています。

さて、こんどは「十干」です。これは古来の中国でこの宇宙を構成する要素が五個あり（五行→木・火・土・金・水）それぞれに陰陽あり兄と弟に分けて十になる。漢字をあてて「甲・きのえ・こう」「乙・きのと・おつ」「丙・ひのえ・へい」「丁・ひのと・てい」「戊・つちのえ・ぼ」「己・つちのと・き」「庚・かのえ・こう」「辛・かのと・しん」「壬・みずのえ・じん」「癸・みずのと・き」以上です。

十と十二ですら一周回るのに六十年かかります。ちなみに私は昭和二十九年の「甲午・きのえうま」生まれです。今年がちょうど一回り「還暦」というわけです。でも昔はおじいさんでしたが今は六十歳はまだ若い。皆さん頑張りましょう。

民話の小箱（宮城県）

まま母と地蔵さま　●懺悔

昔し昔し秋田県の能代市（のしろし）というところに、ある夫婦が住んでいました。

なかなか子どもがうまれないので、二人して近くのじぞうさまに毎日おまいりをして、

「どうか、子どもをさずけてくだされ」と、たのみしました。

そのかいがあって、あくる年、男の子が生まれました。

夫婦はたいへんよろこんで、名を信吉（しんきち）とつけました。

しかし、信吉が五つのときに母親が死んでしまい、こまった父親は新しい妻（つま）をむかえました。

やがてあたらしい母は男の子をうむと、その弟の方ばかりかわいがり、信吉をいじめるようになりました。

ある日の事、母はわずかなお金をもたせて、信吉をおつかいにだしました。

しかし、信吉はなかなか戻ってきません。

「まったく！　あの子は何をしているんだ！」

イライラした母は信吉が帰ってくるなり、するどくとがった火ばし（炭火などをつかむ金属製のはし）をもって、信吉におそいかかったのです。

信吉がビックリして逃げだすと、母は火ばしをもったまま後をおいかけて、人気のない道で火ばしを信吉の頭のうしろへつきさしたのです。

「ギャアーー！」

と、いって、信吉はバッタリとたお

一口法話

いただきます・ごちそうさま

最近食事の時に「いただきます。」「ごちそうさま。」の挨拶をする家庭が少なくなったと聞きます。知恩院では、食事の前後に必ず食前（後）のことばの後、十回のお念仏をお称えします。「人は一日に十万の命を頂いて暮らしている」といわれます。私たちが気づきながら、生きるためにしょうがなく奪ってしまう命もあり、また知らぬうちに奪ってしまっている命もあるのです。この世で暮らす私たちは、数えきれないほど多くの命を奪っているという事を先ず理解せねばなりません。

お魚さん、ぶたさん、うしさんも。その命たちは、決して私たちに食べられるためにこの世に生を受けたわけではありません。私たちと同じく尊い命を頂いて必死に生きているのです。お米も野菜も大豆だって同じです。

では私たちは、そんな多くの命に

れました。
「ふん！　早く帰ってこないお前がわるいんだ」
　母は家へもどると知らんぷりをして、父親がかえってきても、
「まったく、どこまで遊びにいっているんだ」と、ごまかしていました。
　夜になって三人きりで夕はんを食べようとしたとき、家の戸があきました。なんとそこには、信吉が立っていのです。
　ビックリした母は、走りよって信吉の頭をマジマジと見ました。信吉の頭には、火ばしでさされたあとはありません。
母は夜中になるとこっそりぬけ出して、信吉を刺し殺した場所に行ってみました。
　するとそこには信吉ではなく、お地蔵さんが転がっていたのです。
「も、もしかして！」
　そのお地蔵さんの頭を見てみると、なんと、火ばしがささったままではありませんか。
「ああ、わたしは子どもになんて事をしたんだ。かんにんしてけれよ」
　母は家に帰ると父親と信吉に今日の事を全部話して、二人に泣いてあやまりました。
　そしてその日から、母はやさしい母親になったという事

おしまい

対して、いったいどんな思いを持つべきでしょうか。ある先生が「今日、カニを食べた。カニの命を食べた。カニの一生を食べた。カニさん尊い命を有難う。」といいましたが、まさに、この心こそ、私たち人間が人として持つべき姿なのではないしょうか。カニも豚も野菜もどれも食べてしまえば消えてしまいます。でもそれは消えてなくなるのではなく、消化するのだと思います。その尊い一生をわが身に化生させていただくのです。
　法然上人のみ教え「南無阿弥陀仏」のお念仏を手を合わせてお称えして、「いただきます。」「ごちそうさま。」と頭を下げる心が大切なのです。

総本山知恩院布教師会ホームページより

書への誘い

「父と子と母」

故林　錦洞　書

貞林院瑞正寺　住職　林　清方

　左から「父」・「子」・「母」と書かれており、家族のぬくもりが表現されています。「父」と「子」はハワイのペトログリフで書かれ、「母」は中国の甲骨文字で、ひざまずいて子どもに乳を与える女性の姿を表しています。
　ペトログリフとはハワイ先住民により描かれた石刻画であり、現在もハワイ各地に残っています。長い間野ざらしであったため風化や摩耗も激しく、これらを保存すべく保護地区なども指定されています。
　先代は昭和四〇年代にこのペトログリフと出会い、書家としてその線画による形象に深く感銘するとともに、中国古代文字との類似性にも興味を持ち、その後の書作活動、創作意欲に強い影響を受けました。このペトログリフにはハワイ先住民の家族愛、狩猟への感謝、平和の祈りなどが込められており、彼らの魂が伝わってくると同時に失われた文化の悲哀も感じられます。
　この出会いからペトログリフの感動を現代に復元し、先住民への親愛の情を多くの人々に書を通じて伝え理解してもらいたいと願い、その後ペトログリフを題材とした多数の作品を手掛けております。
　昨今では親が子に、子が親に暴力を振るう事件は珍しくありません。この作品から親子の情愛とは何かをもう一度原点に戻って、み仏の慈しみの心を呼び覚ましましょう。

秋の彼岸法要ご案内

秋の彼岸法要は次のとおり行いますので、お参りください。

九月二十三日（火）正午より

彼岸法要は中日の正午に先祖代々のご回向をいたします。塔婆をご希望の方は、電話・ファックス・メール等にて寺までお申し込みください。

塔婆料　三千円
回向料　志納

「いわき市仮設住宅を慰問」

第六回目となる仏教情報センター有志による慰問を、七月二十九日に行いました。日頃ボランティアで仏教テレホン相談をしている各宗派の僧侶が集まり二ヶ所の仮設住宅を慰問しました。今回は午前に中央台高久第一仮設住宅を、午後に原発の関係で避難されている方々が集う富岡町社会福祉協議会運営の平サロンを慰問しました。

当日は丁度東北の被災地や仮設住宅を回り、歌で復興支援を行っているエンターテイナー響貴永幸（ひびきえいこう）さんも慰問にいらしており、歌や楽しいトークを披露していただきました。

「時節柄お盆の相談もありました」

響貴さんは釜石市出身の気仙沼市育ちで、現在各地でのライブをはじめ老人福祉施設や養護学校などを慰問して歌の活動をされています。

震災から約三年半が過ぎようとしていますが、今でもこのように地道な活動を通じて復興支援をされている方がいることは大変有難いことです。

「衣裳は奇抜ですが歌はさすが！」

仮設生活も長くなり皆さんのストレスも相当なものと思われます。原発で避難されている方々は故郷にお墓があるのに簡単にお参りもできない、せめていわき市内で年回の法事ができないものかと訴えておりました。我々仏教界の者としても何とかできないものか帰りの電車の中で熱く語り合いました。

寺からのお願い

住所地などの変更につきましては、必ず寺までご連絡くださるようお願いします。

寺からのご案内などは、現在ほとんどがメール便ですので、住所が変更されている場合、戻ってきてしまう事例が増えております。何卒ご協力の程よろしくお願いします。

◇これも仏教用語なの？◇

「正念場」

「今が正念場」などとよく使われるこの言葉は、お釈迦さまが説かれた八正道（はっしょうどう）からきています。お悟りをひらかれ初めての説法で、苦しみから脱するためには八つの正しい行いをしなさいと説かれています。「正見」・「正思惟」・「正語」・「正業」・「正命」・「正精進」・「正念」・「正定」という八つの正しい行いを示されています。

「正念」とは雑念を払い物事の現象にとらわれることなく、常に真理を求める心を持つことです。そこから「正しい心」や「正気」が必要である大事な場面を「正念場」というようになった訳です。私たちも世間に惑わされることのないよう、正しい心を持ち続けるよう努めましょう。

（貞林院瑞正寺）